## 主屋

桁行１０間、梁間５間の規模を有し、東半に土間、西半に居室を配する。居室はオモテザシキ、オクザシキ、ウラザシキ、ナンド、広間の５室構成で、オクザシキはウラザシキ境に押板形式のトコを備え、西面下屋内には濡縁と小縁を設ける。広間にはほぼ中央の土間寄りに囲炉裏、北寄り隅にナガシが設置され、土間は北東隅を馬屋としている。構造は入側柱と上屋柱からはね出した四面上屋梁の先端を受ける四方下屋造りで、小屋組は合掌束立て形式として四方に屋根を葺き降ろす。江戸時代初期の古式を伝え、関東地方で最古に属する民家として価値が高い。

### 主屋北面突出部

一室の開放空間となり、北西隅に風呂場、その東中央付近に染色用の釜（煉瓦造）を設置している。現在の建物や設備は明治から大正時代のものであるが、発掘調査の結果、北面突出部は１８世紀までには建設され、１９世紀の前半までの間に２度の増築を行い、現在と同規模の建物を有していたことが確認されている。

主屋　正面（東南）

主屋（東面）

庭園より主屋を撮影（南面）

主屋（南面）

主屋（オモテザシキ、オクザシキ）

主屋（広間）

主屋（土間）

背面突出部と染色竈の煙突

染色用の竈（煉瓦造）